

高校における部活動への参加が学習意欲にもたらす影響

1200500 濱 晃介

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

本研究では、高校生活における部活動が学習意欲に対してどのような影響を及ぼしているのか、部活動を行うことで学習意欲は高まるのかについて、運動系部活動、文化系部活動、部活動なしの3つのグループに分けて重回帰分析を行った。そして、高校において、部活動を行っている生徒の特徴が部活動への意欲を媒介に学習意欲に与える影響を3グループ間で比較した。

2. 序論

学校生活における部活動は重要な役割を担っている。高等学校学習指導要領(平成30年3月告示、令和4年4月施行)においても、部活動は「スポーツや文化および科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等、学校教育が目指す資質・能力の育成に資するもの」と明記されている。また、運動部活動では、体力や技能の向上を図ることや、異年齢の交流の中で、生徒同士や生徒と教師等との好ましい人間関係の構築を図ること、学習意欲の向上や自己肯定感、責任感、連帯感の涵養に資することなども目的としており、文化系部活動では、生徒が生涯にわたって芸術文化等の活動に親しむ基礎を形成することが目的とされている。このことから部活動は、生徒の多様な学びの場として、教育的意義が大きいことが考えられる。

角谷ら(2001)は中学生を対象としてはいるが、部活動が学校満足度を高める要因となる可能性を示唆している。石田ら(2006)では、部活動に所属している中学生247名を対象に、中学生において、部活動の意欲が学習意欲にどう影響しているのかを研究している。その結果として運動系部活は、部員主体性と集団凝集性、顧問のやる気評価が部活動の意欲を高める効果を有しており、文化系部活では、部員主体性が部活動の意欲を高める効果を有していることを明らかにしている。そして、部活動への意欲を媒介にして、学習意欲に影響を及ぼしていることが示されている。以上のことから、中学生における部活動の教育的意義があることは以上の論文で示されている。

しかし、高校において部活動は学業に対して良い影響を及ぼしているのだろうか。高校は中学校より部活動の時間が多くなり、部活動の活動内容についても中学校より高校のほうがより本格的な活動となる。また、勉強についても高校のほうがより難しい内容になる。休日も大学受験を意識した模擬試験や一日中部活動を行っている生徒もいる。このような状況から高校における部活動は生徒に対して、学習意欲に対して負の効果ももたらしているのではないかと考えられる。

竹村ら(2007)は高校生を対象として、スポーツ系部活動が学業の目標志向性および、適応について違いがあるのかについて検討し、学業の達成目標と適応に対して正の効果があることを示した。しかし、竹村ら(2007)では文化系部活動にはどのような効果があるのかが示されていない。そこで、本研究では、高校における部活動が学習意欲に良い影響をもたらしているのか、また、部活動を行っている生徒は部活動を行っていない生徒と比べて学習意欲が高いのかを検討する。また、運動系部活動と文科系部活動で学習意欲に及ぼす影響の違いはあるのかについて検討する。

3. 目的

本研究では、高校において部活動への参加が学習意欲にどのような影響を及ぼしているのかを、運動系部活に参加している生徒、文化系部活に参加している生徒、部活動に参加していない生徒の3つのグループに分けて分析を行う。本研究では、石田ら(2006)の研究で用いられたモデルをもとに、分析を行った。部活動に参加している生徒に対しては、生徒たちが主体となって部活動を行っているという特徴を示す部員主体性、部活動内で生徒同士がお互いに協力しあっているかを示す集団凝集性、部活動において自分の能力がどの程度かを示す部活評価の3つが部活動への意欲を媒介とし、学習において自分の能力がどの程度かを示す学習評価とともに学習意欲を高める影響を与えるというモデルを作成し、図1とした。部活動に参加していない生徒に対しては、学習評価が学

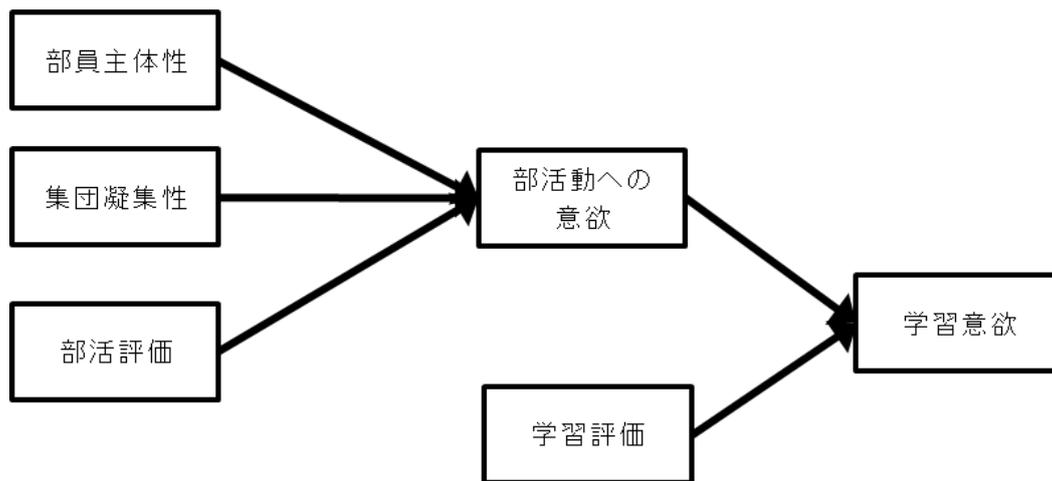


図1 学習意欲に及ぼす影響モデル（筆者作成）

学習意欲へ及ぼす影響を分析した。

4. 仮説

先行研究である石田ら(2006)は、中学生に同じ調査を行い、中学生において部活動を行うことで学習への意欲を高める効果を示した。本研究では、対象を高校生としているが、高校においても部活動は学習意欲を高める影響を与えているのではないかと考えられる。また、部活動を行っている生徒は、部活動を行っていない生徒よりも学習意欲が高いのではないかと考えられる。以上の内容を図1のモデルを使用し、検討を行う。具体的な仮説としては以下の5つが挙げられる。

仮説1 部活動において技術、能力の高い生徒ほど、部活動への意欲は高い

仮説2 部員主体性、集団凝集性が高い生徒ほど部活動への意欲は高い

仮説3 学習能力の高い生徒ほど、学習意欲は高い

仮説4 部活動への意欲が高い生徒ほど、学習意欲は高い

仮説5 部活動に参加している生徒は、部活動に参加していない生徒よりも学習意欲は高い

5. 研究方法

調査対象として、高知県の公立高校の一年生267名（男子127名、女子140名）にアンケートを行い、運動系部活動に所属している生徒150名、文化系部活動に所属している生徒72名、部活動に所属していない生徒45名を3つのグループに分けて分析を行った。なお、この高校は、部活動への参加を強制ではなく任意的なものとしており、部活動の種類も、30種以上にわたっていることから、部活動が盛んにおこな

われていると考えられる。また、学科は普通科と理数科の2種類あり、さらに、情報教育、国際理解教育の推進を行っているため、部活動だけでなく、学業にも力を入れている学校である。

本研究で分析を行うために使用したアンケートの内容は以下のとおりである。

① 部活動への意欲

石田ら(2006)の研究で用いられた質問項目を用いた。

“部活動は楽しい” “部活動に対する自分なりの目標がある” “部活動に一生懸命取り組んでいる”の3項目から構成され、各項目について「当てはまる(5)」から「当てはまらない(1)」の5段階で評定させた。

② 部員主体性

石田ら(2006)の研究で用いられた質問項目を用いた。

“部員のみんなは、顧問の先生がいない時でもしっかり活動している” “部員のみんなは、自分たちが主体となって活動している”の2項目から構成され、各項目について「当てはまる(5)」から「当てはまらない(1)」の5段階で評定させた。

③ 集団凝集性

石田ら(2006)の研究で用いられた質問項目を用いた。

“部員のみんなは、とても仲がいい” “部員のみんなは、お互いにとっても親切である”の2項目から構成され、各項目について「当てはまる(5)」から「当てはまらない(1)」の5段階で評定させた。

④ 部活動の評価

石田ら(2006)の研究で用いられた質問項目を用いた。

表1 運動系部活生徒のスコア

	平均値	標準偏差	中央値	最大値	最小値
学習意欲	3.337	0.754	3.500	4.750	1.000
学習能力	4.329	0.786	4.667	5.000	1.333
部活動への意欲	4.470	0.742	5.000	5.000	1.500
部活動評価	4.503	0.736	5.000	5.000	2.000
部員主体性	2.767	0.958	3.000	5.000	1.000
集団凝集性	2.900	0.954	3.000	5.000	1.000

表2 文化系部活生徒のスコア

	平均値	標準偏差	中央値	最大値	最小値
学習意欲	3.365	0.889	3.375	5.000	1.000
学習能力	3.963	1.108	4.333	5.000	1.000
部活動への意欲	4.222	0.745	4.500	5.000	2.000
部活動評価	4.160	0.855	4.250	5.000	2.000
部員主体性	2.694	0.944	3.000	5.000	1.000
集団凝集性	2.833	0.993	3.000	5.000	1.000

表3 部活動なし生徒のスコア

	平均値	標準偏差	中央値	最大値	最小値
学習意欲	3.344	0.836	3.250	5.000	1.500
学習能力	2.956	0.976	3.000	5.000	1.000

“あなたは、部活動においてほかの部員と比べて、どの程度の技術や能力があると思いますか”という質問について「高い(5)」から「低い(1)」の5段階で評定させた。

⑤ 学習の評価

石田ら(2006)の研究で用いられた質問項目を用いた。

“あなたはほかの生徒と比べてどの程度の成果を収めていると思いますか”という質問について「高い(5)」から「低い(1)」の5段階で評定させた。

⑥ 学習意欲

石田ら(2006)の研究で用いられた質問項目を用いた。

“勉強は面白い”“授業は熱心に聞いている”“一生懸命勉強している”“家でも勉強している”という質問について「当てはまる(5)」から「当てはまらない(1)」の5段階で評定させた。

本研究では、部活動に参加している生徒に対しては、①～⑥の質問をすべて行い、部活動に参加していない生徒に対して

は、⑤と⑥のみ質問を行った。

6. 結果

被験者を運動系部活生徒、文化系部活生徒、部活動なし生徒の3つに分類し、各設問に対する設定スコアの記述統計を算出し、比較した。運動系部活生徒の記述統計を表1、文化系部活生徒の記述統計を表2、部活動なし生徒の記述統計を表3にまとめた。次に、図1で示したモデルの有意性を検討するために、運動系部活、文化系部活、部活動なしのそれぞれで重回帰分析を行った。部活動への意欲については、部活動への意欲を目的変数とし、部員主体性、集団凝集性、部活動での評価を説明変数とする重回帰分析を行った。学習意欲については、学習意欲を目的変数とし、学習の評価、部活動への意欲を説明変数とする重回帰分析を行った。部活動を行っていない生徒の関しては、学習意欲を目的変数とし、学習への評価を説明変数とした単回帰分析を行った。それぞれの分析において、標準化係数(β)とともに運動系部活の生徒のパス図を示したものが、図2、文化系部活の生徒のパス

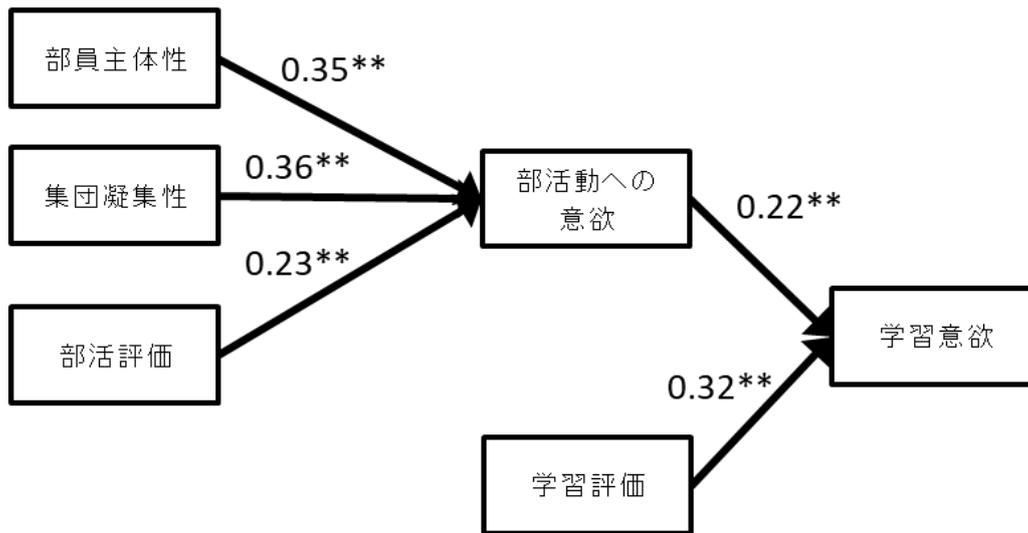


図2 部活動が学習意欲に及ぼす影響（運動系部活）

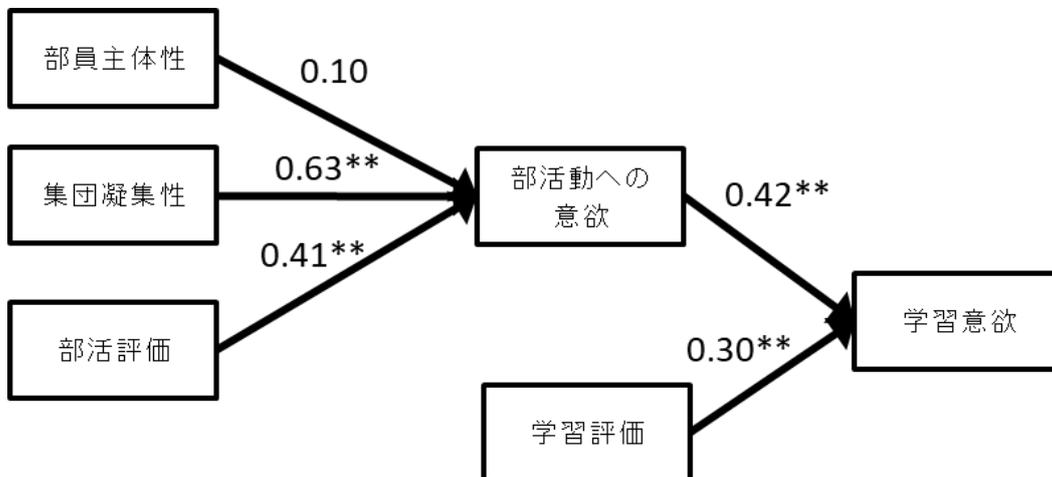


図3 部活動が学習意欲に及ぼす影響（文化系部活）

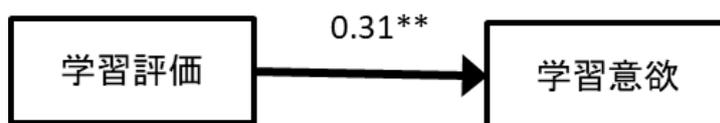


図4 学習評価が学習意欲へ及ぼす影響（部活動未参加）

図が図3、部活動なし生徒のパス図が図4である。

運動系部活の結果

部活動の意欲については、部員主体性 ($\beta = .35, p < .01$)、集団凝集性 ($\beta = .36, p < .01$)、部活動の評価 ($\beta = .23, p < .01$) それぞれから有意な正のパスが示された。この結果から、運動系部活動における部活動への意欲については、部員主体性、集団凝集性、部活動の評価3つが大きな影響を及ぼしていることが示された。学習意欲については、学習評価から有意な正のパスが示された ($\beta = .32, p < .01$) とともに、部活動への意欲からも有意な正のパスが

示された ($\beta = .22, p < .01$)。ただし、部活動の評価、部員主体性、集団凝集性の3つからの直接的なパスは認められなかった。このことから、部員主体性、集団凝集性、部活動の評価の3つは部活動への意欲を媒介として間接的に影響を及ぼしていることが示された。

文化系部活の結果

部活動の意欲については、集団凝集性 ($\beta = .63, p < .01$)、部活動の評価 ($\beta = .41, p < .01$) から有意な正のパスが示された。部員主体性からのパスは5%以上の有意水準を満たさなかったため、認められなかった ($p = .17, p$

<.01)。この結果から、文化系部活動における部活動への意欲については、集団凝集性、部活動の評価の2つが大きな影響を及ぼしていることが示された。学習意欲については、学習評価から有意な正のパスが示された ($\beta = .30, p < .01$) とともに、部活動への意欲からも有意な正のパスが示された ($\beta = .42, p < .01$)。ただし、部活動の評価から直接的なパスは認められなかった。このことから、部活動の評価は部活動への意欲を媒介として間接的に影響を及ぼしていることが示された。集団凝集性においては直接的な有意な正のパスが示されたが、標準化係数の値が部活動の意欲を媒介したほうが大きいことから、間接的な影響のほうが大きいことが示された。

部活動なしの結果

学習意欲について、学習評価から有意な正のパスが示された ($\beta = .37, p < .01$)。このことから、学習評価から学習意欲に直接的な影響を与えていることが示された。

また、部活動を行っている生徒と部活動を行っていない生徒を比較し、学習意欲に差があるかどうかを、部活動に参加している生徒と参加していない生徒の平均値の差の検定を行った。その結果を図5とした。

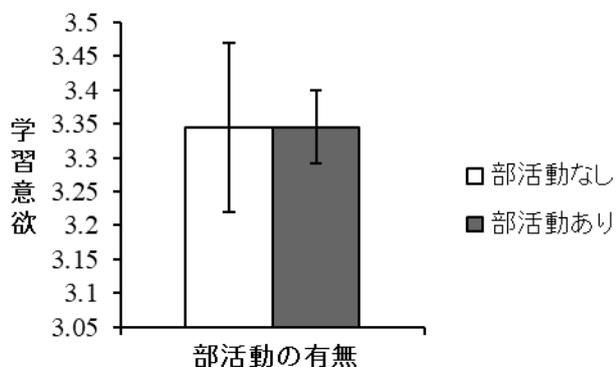


図5 部活動の有無による平均値の差の検定

7. 考察

本研究では、運動系部活と文化系部活、部活動なしの3つのグループの違いを考慮しながら分析結果を検討する。

部活動への意欲について

運動系部活動においては、部員主体性、集団凝集性、部活動の評価の3つから有意な正のパスが示された。この結果から、部員主体性、集団凝集性、部活動の評価の3つが部活動への意欲へ影響を及ぼしていることが示され、仮説1と仮説2は支持されたといえる。文化系部活動においては、集団凝

集性、部活動評価の2つから有意な正のパスが示され、部員主体性からのパスは認められなかったため、仮説1のみ支持され、仮説2は支持されないという結果になった。

この結果について考察する。部活動における評価から部活動への意欲に対しての影響が運動系、文化系部活動ともに正のパスが示されているが、運動系部活動と比べると文化系部活動のほうがパス値が大きいことから、部活動における評価が、運動系部活動と文化系部活動では、異なっていることが考えられる。運動系部活動では、試合に出られる選手が限られており、部員は部活動における技術や能力によって評価されている。ほかの部員と比べて高い技術・能力を評価されている部員は試合に出ることができ、さらに部活動の中心の存在として活動していることが考えられることから部員主体性が高くなり、部活動の意欲が高くなる。また、運動系部活動では、集団で行動することが多いことから、集団凝集性が高くなり、部活動への意欲が高くなっているということも考えられる。それに対して、技術や能力の低い生徒は、試合に出られないことが多く、また、試合に出ることができない部員は試合に出る部員のサポートに回ったりすることで、自分自身の練習の時間が確保できていないということから部活動への意欲が低くなる。さらに、本研究では1年生のみを分析の対象としているため、上級生のほうが試合に出ているため、試合に出る機会を失っていることも考えられる。このように、運動系部活動では技術・能力重視の特徴があり、このことが部活動への意欲に大きな影響を及ぼしていることが考えられる。

一方、文化系部活動では、選手や補欠といった区別はあまりなく、部活動における技術や能力で評価されることが少ないが、高校の部活動として活動するという事は自分の趣味・特技を考慮したうえで部活動を選んでいるため、能力・技術の評価が部活動への意欲に影響を及ぼしていると考えられる。また、部員主体性のパスが認められず、集団凝集性のパスが高いことから、高校の文化系部活では、ほかの生徒と切磋琢磨し部活動をするというよりも、ほかの部員たちと仲良く部活動を行うという特徴が部活動への意欲に影響を及ぼしていると考えられる。

学習意欲について

学習評価が学習意欲に及ぼす影響については、運動系部活動と文化系部活動、部活動未参加の3つのグループで有意な正

のパスが示された。この結果から、仮説3は支持されたといえる。本研究では、学習の評価を実際の学業成績の評価ではなく、自己評価で測定しているため、本研究での学習評価の高さは自分の学習に対する評価の高さを表している。このことから、学習に対して生徒が自信を持つことは学習意欲の向上につながる事が考えられる。また、部活動への意欲から学習意欲へ及ぼす影響についても、有意な正のパスが示された。この結果から、部活動への意欲は学習意欲へ影響を及ぼす要因であることがわかり、仮説4が支持された。本研究では、部活動への意欲が学習意欲に及ぼす影響は、運動系部活動よりも文化系部活動のほうが大きかった。このことは石田ら(2006)でも考えられている通り、文化系部活動で行われている内容が運動系部活動と比べて、教科の学習に近いからではないかと考えられる。しかし、運動系部活動への意欲についても、学習意欲に影響を及ぼしていることから、文部科学省の「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」に明記されている、体力や技能の向上を図る目的以外にも、異年齢との交流の中で、生徒同士や生徒と教師等との好ましい人間関係の構築、学習意欲の向上や自己肯定感、責任感、連帯感の涵養に資するなど、生徒の多様な学びの場としての部活動としての目的は示された。

部活動の有無について

部活動に参加している生徒の学習意欲と部活動に参加していない生徒の学習意欲の平均値の差の検定を行ったところ、部活動に参加している生徒と部活動に参加していない生徒との平均値の差が見られなかったため、部活動の有無は学習意欲に影響を与えていないことが示された。このことから、仮説5は支持されなかった。この結果について考察する。部活動を行うことが学習意欲を高める影響を及ぼしていることは、運動系、文化系部活動の分析結果から示されている。(図3、4)しかし、部活動に参加している生徒と参加していない生徒とで、学習意欲の差がないことから、部活動を行っていない生徒も別の要因で学習意欲を高めているのではないかと考えられる。部活動を行うことは学習意欲を高める効果はあるが、清水(2011)も、運動系部活動のみの検討ではあるが、部活動は生徒の自主的・自発的活動であると示していることから、部活動を行うことを必修化すべきではないと考えられる。本研究では、部活動を行っていない生徒に対しての分析については、学習評価からの影響しか分析していない。別の

要因が学習意欲に対してどのように影響を及ぼしているのかの分析も行う必要がある。

8. 今後の課題

本研究では、アンケートの回答をすべて生徒自身の自己評価で行っているため、主体的な評価しか分析できていない。客観的な評価を含めて分析することができれば、部活動が学習意欲に対して及ぼしている影響をより細かく分析することができるのではないかと考えられるため、検討する必要がある。さらに、本研究のアンケートでは、部活動の参加の有無のみを聞いているので、委員会、生徒会活動を文化系部活に含めているかは被験者の各自の判断になっている。また、本研究は高校1年生のみを対象としているので、2,3年生を対象も含めた分析を行うなど、さらなる検討が必要である。また、本研究は、部活動の意欲から学習意欲への影響の分析しか行っていないため、学習意欲から部活動の意欲への影響は分析できなかったため、今後の課題である。

9. 参考文献

- 石田靖彦・亀山恵介(2006)「中学校の部活動が学習意欲に及ぼす影響 ～部活動集団の特徴と部活動への意欲に着目して～」愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 9, 219-225
- 角谷詩織(2005)「部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか：学業コンピテンスの影響を考慮した潜在成長曲線モデルから」発達心理学研究, 16, 26-35
- 竹村明子・前原武子・小林稔(2007)「高校生におけるスポーツ系部活参加の有無と学業の達成目標および適応との関係」教育心理学研究, 55, 1-10
- 角谷詩織・無藤隆(2001)「部活動継続者にとっての中学校部活動の意義-充実感・学校生活への満足度とのかかわりについて-」心理学研究, 72, 79-86
- 清水将(2011)「高等学校における運動系部活動の教育課程上の位置づけに関する検討」東亜大学紀要, 14, 17-32
- スポーツ庁(2018)「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」
- 文化庁(2018)「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」
- 清水 裕士(2016)フリー統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実施における利用方法の提案, メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73